



2012・6

SORA 43号

糸島 小林 朱 夏

どの村も自慢の花と山のあり
見返れば滝のしぶきの中に山
枇杷熟れて包む袋も枇杷の色
母が居て麦茶の匂ふ厨かな
消灯の後明か明かと熱帯魚

熊本 松田 明子

城内の父の母校に入学す
子らの来て古墳の丘のかげろへり
連風の風うならせて駆け上がり
刈り終へし羊よろけて立ち上がる
筥を提げて各駅停車かな

須恵 苑 実 耶

教科書の一頁めのさくらかな
あれそれで話通じる花の宵
花明りもつとあなたを好きになる
葱坊主育てしやうに子は育ち
泣きじやくる子に花ふぶき花ふぶき

山梨 野畑 さゆり

はらからの父似母似や桃の花
花冷えや鴨居に父のソフト帽
朧夜や写真に母の舞姿
先頭は一年生やつくしんぼ
新わかめ茹で玄海の色となる

大阪 青木 朋子

花びらをつつく魚をり水の空

ふらここや風生み風に乗る朝あした

巡る寺ひとつ残して春の暮

半分は咲けよと花種蒔きにけり

思ふほど売れてはをらず植木市

吉井 高倉 恵美子

老人はすぐに知り合ふさくらかな

亀鳴くや夫と同じ夢を見て

立つことに始まるリハビリ春の雨

ぎしぎしや幼名呼びて笑ひ出す

融通の利かぬ指なり桜の実

福岡 吉村 摂護

坑道を這ひし白寿の雑煮餅

リハビリの帰り吹雪に堪へる杖

春の水通す田溝に子規の声

年下の人の訃を聞く春の月

弾箒で啜り込みたり心太

福岡 山内 碧

菜の花や自転車土手に乗り捨てて

夕桜猫呼ぶ甘き声聞こゆ

連翹やかすかに人の棲む気配

大鳥居くぐり見上ぐる花の山

露剥くや母より姑に似てきたり

東京 古川 夏子

三鬼の忌風に舞ひたる砂痛し
婆婆ふたり花の川筋上りゆく
飛花落花水切り石に倦む時も
海紺青甕に藍ある花の昼
さ夜深く玉の井辺り余花の雨

東京 山田 正子

振り返るまつすぐな道麦の秋
椎の花匂ふ左は女坂
竹皮を脱ぐ少年は声変り
滝白し落ちてより水清らかに
散骨はここと決めたる青岬

大阪 河隅 恵子

くるりくるり瓜うらがへる桶の中
物忘れ多くなりたる髪あらふ
ははの手をはなせし子らの夕立に
黒猫とわたしに梅雨の月夜かな
お護りをいただいてゐる髪洗ふ



空作品抄
—
柴田佐知子抽出



ふらここを漕ぎてどこへも行けさうな

高倉 和子

永き日の塔婆がのぞく塀の上

中田 みなみ

あたたかや獣らはみな尾を持ちて

荒井 千佐代

受話器とるいつもの右手夕長し

柴田 志津子

開演の華やぎに似て鶯鳴く

服部 早苗

芥子坊主無理はしないと何もせぬ

だいじみどり

闘鶏に眉間のあらば太き皺

原 友子



たんぼぼや棚田の隅に牛馬の碑

重たげに畦の色して蓬餅

じわじわと赤勝りたる躑躅山

掛けしごと豹のだらりと春の昼

放鷹のくぐり抜けたる驟雨かな

使徒はいま祈りの中や花蜜柑

芽柳の己れを容るる御簾の中

たんぼぼの顔して子らの見上げたる

叱られて二階は広し花の雨

囀のすでに眩しき雨戸繰る

紅白の匂ひひとつに梅の花

枇杷熟れて包む袋も枇杷の色

刈り終へし羊よろけて立ち上がる

宮井知英

田代貞枝

栗原京子

秋千晴

亀井紀子

あさなが捷

鳳 蛮 華

矢野百合子

吉田 菫

田岡千草

長 憲 一

小林朱夏

松田明子

教科書の一頁めのさくらかな

新わかめ茹で玄海の色となる

巡る寺ひとつ残して春の暮

老人はすぐに知り合ふさくらかな

坑道を這ひし白寿の雑煮餅

露剥くや母より姑に似てきたり

三鬼の忌風に舞ひたる砂痛し

滝白し落ちてより水清らかに

物忘れ多くなりたる髪あらふ

故郷のあいつも古希かげんげ摘

日本に会釈ありけり梅香る

淡雪や病めば恋ひしき人ばかり

父のゐて離島のごとし春炬燵

苑 実 耶

野畑さゆり

青木朋子

高倉恵美子

吉村摂護

山内 碧

古川夏子

山田正子

河隅恵子

池田華甲

田岡千章

宮井知英

戸栗末廣



雛の前父が泣くとは思はざり

葉桜や何かと言へば公民館

長老はみ仏の傍御開帳

吊し雛人の気配に揺らぎけり

朱の鳥居くぐれば異界花ふぶき

新学期飼育委員となりにけり

山笑ふ恵比須はいつも釣り支度

放心の色となりゆく山桜

幼児は切符持ちたしチューリップ

補聴器を外せばもとの小春かな

陽炎や父の写真は笑顔のみ

堰落つる水のまぶしき桜かな

川筋を大きく逸れて鳥雲に

織田高暢

柴田志津子

秋千晴

松田明子

苑実耶

野畑さゆり

粟原京子

原友子

小林朱夏

長節子

亀井紀子

矢野百合子

鳳 蛮華

大気圏鱈を大きく金魚かな

薊描く仕上げに棘の紅強く

追ひつけぬ子は小走りに春の風

朧月青年鱗麟のごとく寄る

しばらくは根方に寄せて落椿

風光る子が母の手をふりきつて

連翹や忘れて欲しきこと多し

蓬摘む故郷の山河思ひつつ

初蝶の胸にあたりて過ぎにけり

光ることとうに忘れし螢鳥賊

参道に尾を振る犬や風光る

再会は遺影でありし桜どき

マシユマロの様な赤子や花苺

あさなが捷

白水良子

仲里奈央

吉田 菡

青木朋子

遠山のり子

古川夏子

石川 叔子

小川 涼

今井春生

犬丸勝子

片田きく

山田正子



野良猫の怯む人波花の山

枯老梅蔦の新芽が掩ひけり

青柳や東寺の見ゆる路地がある

柳絮とぶ織る緞通の厚きこと

雪洞の燈る弥生の夜の木立

古りてなほ若き雛を納めけり

葉桜や旧姓で呼ぶ同期会

露剥きて漆黒の手や仕舞風呂

弁当ひらく桜の風に背を向けて

歯科医には舞ひ散る花が歯に見ゆる

老いてこそ昔がありて桃の花

半世紀ぶりに訪ふ家鉄線花

野良猫の今日も来ている縷紅草

山内 碧

ふじの 茜

岸 千手

中原 俊之

清 水量子

湯 村 栞

田 代 貞枝

山 口 弘子

桜 三 奈子

白 木 原 裕毅

川 崎 よしみ

堀 川 征 孝

神 谷 耕 輔

空作品評

柴田佐知子

はと思つたが、どうもうまく言いくるめられたような気分がする。こう思わせるのは、「何もせぬ」という居直つた詠出と、季語の「芥子坊主」のとぼけた味わいによるものであろう。しかし面白いので、ここは煙に巻かれておこう。

鬪鶏に眉間のあらば太き皺

原 友子

ふらふらここを漕ぎてどこへも行けさうな 高倉 和子
ブランコをぐいぐいと漕ぐ。つま先から青空に入つてゆくように。あの高揚感が「どこへも行けさうな」によつて明るく表現されている。

受話器とるいつもの右手夕長し 柴田志津子

春の日がいつまでも暮れかねている「夕長し」。句の内容は、電話が鳴つたので受話器をとつただけなのだが、「いつもの右手」がうまい。ゆるやかに伸ばしたその右手もなんだか長く感じてしまう。胎蕩たるこの季節の気だるくなるほどの穏やかさによつて、醸しだされたような句である。

芥子坊主無理はしないと何もせぬ だいじみどり

「無理はしないと」とあるので、体調が悪いので

鬪争心の強い軍鶏の鬪いは激しい。鋭い眼差しと蹴爪。鬪いに臨む軍鶏の迫力をどのように描くか方法はいろいろあろうが、「眉間のあらば太き皺」と見えないものにまで迫つて本質を捉える作者の気迫には恐れ入つた。見えないはずの軍鶏の眉間の深い皺が見えてくるのである。虚が実を引き出している。

重たげに畦の色して蓬餅

田代 貞枝

以前は家で蓬餅をよく作っていた。摘んできた蓬をたつぷり入れて、その香りと色を楽しんだものだ。「重たげに」があつた蓬餅のぼつてりとした量感を伝える。草木が萌え出るこの季節は野山、そして畦も柔らかな緑にふくらんでいる。「畦の色して」によつて、蓬餅ならではの郷愁の情感が伝わってくる。

(以下略)

空集

柴田佐知子選



啓蟄や点滴ベッドに熟睡し

鮎子を食べふや父母疾になし

永き日や猫の寝そべる網干場

回廊は走るべからず花の冷

鯉幟潮入川を跳ね上る

淡雪や病めば恋ひしき人ばかり

時鳥あつけらかんと鳴き始む

深緑の闇のひと間の生まれけり

黒髪を切りしは昔桐の花

目つむると森の匂ひの柏餅

青梅や日ごとに山の近付きぬ

父のゐて離島のごとし春炬燵

ひこばえは山の神の子やまびこも

ほどほどの隔りにあり囀れる

自適とは十坪の畑を耕しぬ

ものの香の顔の高さに三月来

兵庫 戸栗末廣

糸田 宮井知英

礼状のやはらかき和紙あたたかし 京都 池田華甲

故郷のあいつも古希かげんげ摘

囀のその一禽の鳴くは鳴くは

田楽や理不尽なこと申さるる

炭窯の煙突低し春の蟬

家計簿をあはす蛙のめかり時

日本に会釈ありけり梅香る

大阪 田岡千章